
セイギノミカタ

イマジンカイザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セイギノミカタ

【Nコード】

N6991M

【作者名】

イマジンカイザー

【あらすじ】

小・中学生のほとんどが一度は体験したことがあるであろう『いじめ』問題。そんないじめに対するさやかな反抗とその対策らしきものを概ねコメディタッチで描いたハートフルボッコ全編主人公の自分語り小説です。

前編（前書き）

本小説はほぼ全編にわたり「主人公の自分語り」で進行します。地の文が存在しないため、場合によってはどこからが台詞で、どこからが状況説明になるか分かりにくい場合がございますのでご注意ください。

前編

人は誰しも、外見的・内面的に多種多様の個性を持っており、また、他者の個性を認めながら生きている。

だからこそ人は自分が自分であることを自覚し、他者が他者であることを認識するのだ。その違いを認め合い、尊重することができるからこそ、人間という生き物は素晴らしい。

しかし、個性とは必ずしも、誰しもが相容れ、許容できるものだけではない。

自分では良かれと思っているものが、他人には認められないという事象は、個性というものが人に備わっている以上、避けては通れない問題である。

人という生き物は何であれ、自身が受け入れられることについては容認し、擁護^{ようこ}するやさしさを持っているが、逆に自身が受け入れられない、相容れないものについては、一対複数で徒党を組んで徹底的に排斥し、それを圧殺する残酷さも同時に併せ持っている。

その広義かつ典型的な例が、子どもの頃に学校などで、被害者、加害者……はたまた傍観者のうちどれかを体験したであろう『いじめ』だ。

『いじめ』に、明確かつ筋の通った理由はない。ただ、『ムカついた』、『いじめやすそうだった』などと、どれも幼稚かつ大雑把なものがほとんどだ。

それゆえに言葉による防止も抑止も難しく、ちよつとした出来心や、この国特有の団体意識から、簡単に飛び火する性質があり、民主主義や男女平等を謳^{うた}う現代でも、これに悩まされる少年少女は後を絶たない。

そんな状況を芳しくなく思い、改善しようと試みる生徒や教師もいただろう。

しかし前者は、いたずらに手を出して加害者の怒りを買い、自分もいじめの対象になることを恐れ、

後者は加害者本人、というよりもその保護者からの反感を恐れ、あえて放置（もしくは助長を促したり）ということもあり、助け舟が出る可能性はほとんどない。つまりは泣き寝入りだ。

弱者に平穏はないのだろうか。弱者には一筋の光明すら与えられないのだろうか――

このお話はぼくの通う『とうとりつ もりこし東都立森越中学校』で起こった、ぼくのある女の子が感じた『正義』の是非と、その顛末についてのものだ。

「んだよ、その金髪！ いけないんだあ。髪なんて染めちゃってさあ、ふりよう、ふ・りよ・お」

「ち、違うよ！ これは地毛だもん、それにちゃんと先生にも許可もらってるもん！ ぼくは不良じゃない」

「そんなの屁理屈だ！ なんでお前はよくて、俺たちはいけないんだよ！ 卑怯だ、卑怯だぞ！」

「そんなのぼくに……、ぼくに言われたって」

ぼくの名前は”アルフォート・正義”まさよし。

母は日本人。父はアメリカ人の……いわゆる”ハーフ”だとか、

”日系人”とか言うやつだ。

産まれてすぐに日本に渡ってきたため、日本語は普通に話せるけれど、眼の色は青、髪の色はこの国では珍しい金髪だったのが災い

し、それを妬んだり、モラルが欠けていると批判する子たちの間で、ぼくは格好のいじめの対象になった。

ぼくのような目に遭う子たちは他にもたくさんいたが、彼らのことを気にかけている余裕はぼくにはなかった。自分の身を守るだけで精一杯だったし、不用意に相手を刺激して厄介ごとを増やしたくなかったのだろう。その気持ちはぼくにもよく分かる。だからこそ、ぼくは彼らを責められない。仕方がないんだ。

「みんな、こいつを抑えてる。俺がこいつで金髪を黒く染めてやるぜっ！」

「よぉーし！やってやるぞー！」

「や、やめて、やめてよっ！ぐ、うつ……」

ぼくは二人の男子に両の腕をつかまれて動けなくなった。目の前には本当に黒く染まるのかどうか怪しい、赤黒いスプレー缶を持ったりリーダー格の男子が嫌な笑みを浮かべて立っている。

この髪の色でいざこざが起きることは今までも何度かあり、耐性がついていたつもりだったけれども、ここまで強硬な手段に出られたの初めてだったので、ぼくは激しく抵抗し必死にその行為から逃れようとした。

しかし、いくら抵抗しても二人は離してくれない。不気味な笑い顔とともに、彼の手にあるスプレー缶の噴射口がぼくの髪の前に差し掛かる。

だが、その時だ。

「へへへ……、ざ、くっ！？」

「ぐ、ふっ！？」

「げる、ぐ、ぐ……っ！」

「な、何だ？　なんだ！？　ああ、っ」

セメント製の土管を鉄パイプで叩いたような鈍い音と共に、ぼくにスプレー缶を向けていた男子は、首を真横に向けながらその場に

倒れこみ、白目を向いて気絶した。

あまりにも突然のことにぼく……だけでなく、その取り巻き連中ですらも混乱し、必死に状況を把握しようと努めた。

しかし、彼らがそれを知ることではなく、ぼくの腕をつかんでいた二人の男子は、何者かにのされ、床の上に倒れこんだ。まったくわけがわからない。

ぼくの体を抑え込む二人が倒れたことで、ワントンポ遅れてバランスを崩しその場に尻餅をついた。

それと同時に、ぼくの目の前に一人の女の子がいることに気付く。

長く艶やかな亜麻色の髪に、端正で愛らしい顔立ち。

そのくせ、皆が夏服を着ているのに、ひとりだけ冬服のブレザーを身に纏う不思議さ。

彼女はこちらを見てにこりと笑うと、状況を全く把握できないぼくの目の前にそつと手を差し出した。

「君、大丈夫？ 手、貸してあげるから、さっ」

「は、はい」

ぼくはとまどいながらもその手をつかみ、腕に力をこめてぐぐつと起き上がる。

手の感触はいかにも女の子らしく、薄い肌色で柔らかく、すべすべとした感触だった。

何より印象的だったのは、瑠璃色に輝くその瞳。ぼくはその綺麗な瞳に吸い込まれ、ただ呆けてしまった。

彼女はぼくのそんな様相を見て安心したのか、胸の前で手を合わせてにこやかにほほ笑んだ。

「うん。平気みたいだね。よかった、よかった」

「は、はい。あ、あおう、助けてくれて、その」

かわいいうえに、透き通るように綺麗な彼女の声に、ぼくは少しどきつとし、言葉に詰まる。

彼女はどもるぼくの口の前に人差し指をちよんとかざすところ言った。

「お礼なんていらないよ。わたしは自分のしたいことをしただけだから。っと。そろそろ授業が始まっちゃう。じゃあね」

彼女は手短にそれだけ言うと、身を翻して早足で去って行く。ぼくはその様子をただぼつと見つめて見送った。

彼女のことをもっと知りたい、彼女と一緒にいたい。そう思い始めるのに時間はかからなかった。

それが彼女、桜田瞳璃さくらだ とうりとぼく・正義まさよしとの、はじめての出会いだった。

「弟子に、弟子にしてくださいッ！」

「は、あ!？」

2年B組、出席番号13番。桜田瞳璃さくらだ とうり。弱いものいじめをする子を男女関係なしに倒して回る、美しい瑠璃色るりいろの瞳の女の子。

ぼくはその日のお昼休み、給食を半ば押し込むようにしてたいらげると、自分のクラスの近しい人に名前と教室を聞いて、彼女の元へと足を運んだ。

「きれいな瑠璃色るりいろの瞳」なんて小難しく分かりにくいキーワードを出すまでもなく、『いじめっ子を倒して回っている女の子』を知らない?』とクラスの中そこそこ近しい子に問うだけで、名前もクラスも一発で分かった。どうやら知名度のほうも相当のものらしい。

もちろん、弟子にしてくれというのは、彼女のそばにいたいがためにでつち上げた口実だ。先ほどまでいじめられていたぼくに、真正面からいじめっ子たちに立ち向かう勇気などあるわけもないし、第一、ぼくが弟子になって彼女の補佐をしたところで、何の役にも立たないことは、誰の目から見ても明らかだ。

桜田さんは誰とも席をつけず、一人で給食の揚げパンをもぐもぐと、よく咀嚼^{そしゃく}して食べていた。

助けた子からそんなことを言われること事態予想外だったのか、桜田さんはぼくの言葉に素っ頓狂な声を上げて驚く。

が、すぐに我に返ってたたずまいを直し、ぼくの返答に答えてくれた。

「ちょ、ちょっとびっくり。でも大丈夫だよー。わざわざ君が強くならなかつて、わたしがいるもの。任せてっ」

「あ……でも、ぼく、その……感動したんです！ あんなに強くて、かつこよくて、かわいくて……だから、だから」

ぼくは少ない語彙力で、自分の気持ちを彼女に伝えようと思ったが、そんなぼくの心情を知ってか知らずか、桜田さんは少しいたずらっぽく笑うと、ぼくのおでこに人差し指を突きつけて、軽くぐりぐりと押しながらかう言った。

「それともなあに？ 女の子一人でいじめっ子に向かっていくのが心配だ、とでも言いたいのかな？

失礼な。わたしはそんなにやわじゃないよ。ぜんぜん平気。へーき、へーき」

「でも、その、ぼくは」

ぼくの煮え切らない態度を不機嫌そうな顔で眺めていた桜田さんは、何か少し考えると、お盆に残った揚げパンの欠片をぽんと口の中に放り込んで適当に咀嚼すると、三角パックの牛乳でそれを無理矢理流し込み、指についた揚げパンのパウダーをぺろぺろと舐め取ったうえで給食の食器やお盆をワゴンの方に返して自分の席の前に戻り、ぼくの顔を真正面から見据えて、真面目な顔で答えた。

「強情っていうか、煮え切らないっていうか。ああ、もう。しょうがないなあ。じゃあさ、ついて来てよ」

「ついて行くつて、どこに、ですか？」

「確かめたいんでしょ？ わたしに弟子^{そんなもの}だの、仲間だのが必要かどうかどう

か。わたしには必要ないってこと、教えてあげるから」

桜田さんはそう言うと、有無を言わずぼくの手を掴んで強引に引つ張り、どこかへと連れ出した。

ぼくは彼女に手を引かれるがままに校舎の中を駆け抜け、気がつくど、ぼくは屋上へとつながる扉の前に立っていた。

上がった息を深呼吸で落ち着かせたあと、何故こんなところにやってきたのかと桜田さんに問いかけた。

「こつ、ここは一体……どこなんですか」

「わたしに弟子とか、部下とか、取り巻きとか、そういうものが必要なことを見せてあげるよ。おあつらえむきに、ちょうど呼び出しもかかってたしね」

「よ、呼び出し、それっていったいどういう……、いつ、いいいつ!？」

桜田さんはぼくの問いに曖昧に答えると、扉のドアノブに手をかけてゆっくりと扉を開いた。外の眩しさに目が眩み、ぼくは一瞬目を背けてしまう。

眩しさに目が慣れ、再び目を見開いた先に広がっていたのは、4・5人ほどの屈強でガラの悪そうな男の子たちの集まりだった。

彼らの醸し出す中学生らしからぬどす黒い剣幕に、ぼくは走り疲れて息を切らしているのも忘れ、その場にしゃがみ込んでしまう。

情けない、本当に情けない。桜田さんがいなきや、そのまま漏らしていたかもしれない。

場所は屋上。ひとつしかない逃げ道も、ぼくがしゃがみこんでいる間に彼らの仲間のうちの一人に押さえられ、とてもじゃないが逃げることはできそうにない。

ぼくたちの姿を確認し、出入口を押さえたことを確認すると、集まりの中央にいた男の子が、桜田さんを炯々とした目つきで見据え、不敵な笑みを浮かべつつ口を開いた。

おそらく彼がこの集まりのリーダー格なのだろう。

「逃げずに来てもらえて感謝するよ。桜田の瞳璃さん。普通のやつならビビって逃げちゃうところなんだろうけど、さすがに自称正義の味方様は違うときた」

この、超がつくほど絶体絶命な状況にしながら、桜田さんは臆することなく、不敵な笑みを浮かべて彼らのリーダーに対し言葉を返す。肝の据わり方も普通じゃない。相手もそうだが、桜田さんも本当に中学生なのか？

「あなた、2年D組の増山雄一君、だったっけ？ 意外ね。優等生さんだつて聞いてたから、こんなことするなんて思つてなかった。それに、わたしは別に正義の味方、なんて名乗ったつもりはないけど。助けた子たちがそう言ってくれるだけ」

「あつそ、それはまあいいけどねー。困るんだよなあ、ストレス解消の邪魔してもらつちやあさ。優等生でいるつてのはさ、意外とストレスがたまるもんなんだぜ？ 言うことを聞きたくもない先生の言うことに、いちいちこびへつらったり、したくもないことを喜んでするフリしなきゃなんないし。はけ口が必要なんだよ、特に、そういう優等生さん、つてやつはさ。それを英雄面して俺たちから奪つていきやつて。何様のつもりだよお前」

「そんなの、あなたたちに言われることじゃあないし。あなたたちみたいに弱いものいじめをして楽しんでいるようならくでなしが言つていい言葉じゃないんじゃないの？」

桜田さんの言葉に、増山は彼女に気に入らない、虫唾が走るとも言いたげ目つきを向け、ちつと舌打ちをした。彼女の、桜田さんの態度がよほど気に障つたのだろうか。

「ああそう。ま、いいけど。とにかく、俺たちの邪魔をするのはやめてもらつぜ。お前みたいなのが同じ学校にいられると、目障りでどうしようもない。おーけー？」

「のー、のー、のー。きゃ・っ・か」

桜田さんは特別嫌味たらしくそう言って、自分と相手の顔の前でちゅちゅと指を振る。

もちろん、増山を愚弄する以外の何でもない行為だ。

「ああ、そう。いちいちム力つく奴だな。まあ、いいけど？　だつたら、力づくでお願いするだけだしな！　なあ、みんな？」

挑発に乗った増山は後ろを振り返り、取り巻きの連中に目配せをした。

取り巻き連中は待つてましたとばかりに、右手に左こぶしを打ちつけたたり、どこから持ってきたのか分からないモップや木製のバット、柄の長い竹ぼうきを持ちだして、今すぐにでも戦えると言わんばかりに、手持ちの武器を構え、ぼくたちの周りを取り囲んだ。

ぼくはいますぐにでもこの場を離れたいと思ったが、出入り口は封鎖されているし、なにより怖くて、足がすくんで動けない。さっきの時間、先にトイレに言って用を足していて、本当によかった。

しかし彼女はそれでも、先程まで増山に向けていた不敵な笑みを崩すことなく、彼を見下しているのか軽蔑しているのか。そんな風な目つきで、増山の顔だけを睨みつけていた。

「いいのカナ？　わたしにそんなことべらべら話しちゃって。君のやつてること、君の友達やお父さんやお母さん、先生にだってばらしちゃう……かも、ヨ？」

「は、ア！？　お前、この数を見て言つてんのか！？　馬鹿じゃねえの！？　その減らず口ツ！　二度と聞けねえようにしてやんよ！　やつちまえ！！」

増山が右手をぱつと振り上げた瞬間、ぼくたちを取り囲んだ集団は一斉に桜田さんに飛び掛った。

ぼくはその先のことを想像して恐怖し、思わず顔を手で覆い隠して目を背けてしまう。だって、仕方がないじゃないか、ぼくにできることなんて何もないじゃないか。

目をつぶれども、音はぼくの両耳を介して伝わってくる。

人を殴ったときに発せられる、あの陰鬱とした打撃音。もんどり

うって倒れこむ音。痛みと恐怖の入り混じったおどろおどろしい悲鳴。そのどれもが、目を介さずとも、映像として脳中に伝わってくる。

しかし何かがおかしい。聞こえてくる打撃音は鈍く重いものなんかではなく、しゅっ、しゅっと素早く、風を切るような鋭さを帯びていたし、倒れこむ音はひとつ、ふたつ、いやそれ以上もあった。そして何より、聞こえてくる悲鳴が皆若干太い”男の子”のものだったからだ。

ぼくは意を決して目を覆う手を引き剥がし、まぶたを開いて現実を見据えた。

「ほい、いっちょ上がりーっと。張り合いないねえ、まったく」

ぼくの目に映った光景は、桜田さんが連中に襲われ、泣き叫んでいる場面どころか、

主犯格の増山を、その桜田さんが彼の襟首をつかんで床に叩きつけ、抑え込んでいる場面だった。

彼女に襲い掛かった取り巻き連中は、うめき声すら発することもできず、ぼくの周りで意識を失って、うつぶせや仰向けになって横たわっていた。

ぼくは恐怖のあまり頭がおかしくなったのかと一瞬困惑したが、ほっぺたをつまみ、ついでに右の鼻の穴の中に人差指と親指をつっこみ、鼻毛を二、三本抜いてみて、その痛みがちゃんとあることから、今自分の目の前で起こっている場面が現実であることを自覚した。

床に押さえつけられている主犯格の増山は、予想外の事態と彼女の圧倒的な強さを目の当たりにして、混乱と恐怖に苛まれているらしく、目から涙があふれ出ているのはもちろん、不恰好にも鼻水を垂らし、別に寒くもなるともないのにがたと震えており、先ほどまでのあの炯々としていた目つきや態度は見る影もなかった。

「な、なななな、な……なんなんだよ、ありえねえ、ありえねえよ

！」

「ところがー、これが現実なのです。すごいっしょ」

「まっ、ままま、待ってくれよ！わ、わわわ、分かった、分かった
ってば！ もう弱い者いじめなんてしない！ ごめん、ごめんよオ
！！」

「ふっ、うん。さんざんいろんな子たちを陰からいじめておいて、
『ごめん』の一言で済まそう、っていうんだ」

「し、しない！ 絶対にしないから！ 信じて、信じてくれよぉ！」

増山はさめざめと涙を流し、無様にも鼻水をでろでろと垂らして
彼女に助けを請うた。

しかし彼女は両手で笑顔で彼の頬を掴み、何かの含みを持った微
笑みを彼に見せる。

「自分勝手だよーねー。君って。君にいじめられてた子たちだって言
ってなかったの？ 自分が悪くなんてないのに、ごめんなさい、ご
めんなさいって。許して、許してって。その言葉に君は耳を傾けて
あげたカナ？ 応じてあげたのカナ？ しーてーなぁーいーよーねー」

桜田さんは増山のほおから右手を離し、握りこぶしを作って彼の
目の前で構えた。

増山は即座に危険を察知し、その場から逃れようとするが、それ
よりも一瞬早く彼女は残っていた左手で彼の顔をがっちり固め、
逃げられないようにしていた。

増山は先ほど以上に涙と鼻水を垂らして許しを請うたがそれも無
意味。

彼の右目と左目の間に、少なくとも一月は消えない傷と、強烈な
痛みが襲った。もはや立ち直れないだろう。ご愁傷様だ。

「あー、風が気持ちいいね、正義くん」

「え、ええ……。た、確かに風は、気持ちいい、ですけど」

「なあに？」

「あ、いや。なんでもないです」

時計の針が1時を指し、昼休みも終わりがけた頃、ぼくたちは屋上に仰向けに寝そべっていた。

ときどき顔をくすぐるそよ風が気持ちよかったが、周りで意識を失っている子たちを見ると、そういう気持ちまで冷めてしまい、言い方は悪いのは分かっているけど、せつかくの気分が台無しで少々残念に思う。

この状況を見て感じたことを踏まえ、ぼくはチュッパキャンディを舐めて寝そべっている桜田さんにある質問を投げかけた。

「あの。確かにこの子たちがやったことは悪いことだったと思います。けど、ここまでやる必要は…、あつたんでしょうか」

彼女、桜田瞳璃のいじめっ子の制裁のうわさは、実際にそれを受けた子どころか、その場面を見たことのない子にすら知られているほど、相当なものだった。

桜田さんは弱者をいたぶるいじめっ子に対し、寸分の容赦も慈悲もなく、圧倒的に叩きのめして、自身の恐ろしさをいじめっ子たちに知らしめていた。

その恐ろしさたるや、彼女の拳や蹴りを受けたいじめっ子は、その痛みはもとより、腕を負傷すれば、しばらくの間力が入らず、足を負傷すれば、痛みが引くまで立ち上がることすらできなかったり、女の子の腕から発せられるものとは思えないほどの力で、両腕を雑巾絞りをするかのように、ぎりぎり締め付けて、ひと月は消えないほどのあざを残したりと、やることなすことが無茶苦茶なのだと。

しかし、彼女は普通のいじめっ子たちが、先生からの追及を逃れるために狙う、傷の隠れる服の下などを狙うことは一度もなかった。

彼女が狙う箇所は足、腕、顔など、隠そうとしても隠せないような場所ばかりだった。顔はもとより、足や手は制服で傷やあざを隠せても、その痛みと動作で、負傷していることがわかるからだろう。

「何よ、藪^{やぶ}から棒に。まあ、そう来るとは思ってたけど。じゃあさ、わたしから君にひとつ質問、してもいいかな」

「えっ。ぼくに、ですか？」

「そ。あのさ、どこかにいじめられている子がいたとするじゃない。その子が中途半端にいじめっ子に刃向かったとして、それでその子に対するいじめはなくなると思う？」

この学校に転入したての頃、ぼくと同様にいじめられている子の中で、このままではだめだと一念発起し、ひとり、果敢にもいじめっ子に刃向った子がいたのを思い出していた。

しかし、今まで虐げられ続けていた弱者が、現在進行形でいじめを行っている強者に敵うはずもなく、一矢報いることはおろか、なら有効な手立てを見つけることも出来ぬまま、あっさりと敗れてしまった。仕方のないことだと思う。

結果、その子は今まで以上に陰険で陰湿^{むじ}で惨^{むじ}いじめを受け続け、今では登校拒否児になっているらしい。

そんな事実を目撃している以上、ぼくに彼女の言っていることを否定する術などなく、言葉を詰まらせ、彼女の顔色を伺った。

「無言、ってことは…… なくならない、って答えていいわけだよ。いじめそういうこと。やるからには、中途半端じゃだめなんだよ。いじめっ子たちを倒す力も度胸もないのに向かって行っても、いたずらに相手の怒りを買って、いじめの勢いを助長させるだけ。無駄なのよ」

「じよ、ちよう？ って、どういう意味、ですか？」

「あ。あー……、ははは。小難しく言ってもわからないか。んーとねー。たとえば、ほら。台所の周りをかさかさと駆け回るゴキブリに対して、遠くからしゅーっとひと吹き、殺虫剤を吹きかけたってゴキブリは死なないし、それどころか殺虫剤を嫌がってさらに機敏

に動き回っちゃって吹きかけた側が困っちゃうってこと、あるでしょ？　ちゃんと駆除するんなら、至近距離で長い時間吹きかけなくちゃ。って、このたとえも分かりにくいかな。ごめんね」

「いえ、よくわかった、よくわかったんですけど……、女の子の桜田さんがする話じゃないですよ、それ」

「あは、はは。ゴメン」

女の子がゴキブリを例えに使うのはどうかと思ったが、確かに彼女の言い分はわかりやすく、的を得ていたように思う。

現に桜田さんに叩きのめされた後で、再び自身のいじめていた子を狙うことは一度もなかったわけだし。

「それと、もうひとつ。わたしはね、やっつけた相手に『恐怖』を植え付けることを第一に考えているから、かな」

「きょうふ……、ですか？」

「そ。徹底的にいじめっ子を叩きのめして、『桜田瞳璃には勝てない、敵わない』っていじめっ子たちに自覚させるの。そのあとで、わたしが『またこんなことをしてみなさい！もっともっと痛い目に遭わせてあげる』って言えば、みんな怖がって、いじめなんてすばつとやめるわ」

「でも、それだと。桜田さんは……」

「ふふん、なるほど。正義君の言いたいことはわかるよ。いじめっ子たちから見ればきつとわたしは、自分たちの遊びを邪魔する暴力女だと思われているんじゃないかな。でも、でもね。いじめられている子たち側からのわたしは、『正義のヒーロー』として映っているのよ。さっき増山が言ってた様にね。自分で言ってるけど、ふさわしい言葉を探すと自然にそうなっちゃう、かな」

桜田さんはそこまで言うと、舐め切ったキャンディーの棒の先をティッシュで拭き取ってスカートのポケットの中に放り込んで立ち上がり、話を続ける。スカートの下がスパッツだったことに、ぼくは落胆の念を隠せなかった。

「自分を虐げるいじめっ子を徹底的に叩きのめせば、それまでいじめられていた子はわたしの力を認めて、頼ってくれるようになる。君も知ってるかもしれないけど、いじめってのは、目に見えるもの、体を受ける直接的な傷だけが全てじゃないのよ。机やイスへの落書きや物隠し、よってたかつての言葉の暴力だって立派ないじめ。しかも厄介なことに、そういう間接的ないじめは、やられた子が仕返しを恐れて、黙ったままにすることが多いの」

桜田さんはそこで口を閉じて一拍置き、寝っ転がるぼくの顔に人差し指を指して、自信ありげな表情で再び口を開いた。

「そこでわたしの出番、ってわけ。いじめっ子たちをめっちゃめっちゃに叩きのめして、わたしがそんなやつらよりも強くて、頼れることをいじめられっ子たちに伝えるの。そうすれば誰も彼もが、仕返しを恐れずにわたしを頼って、いじめの告げ口をしてくれる。わたしはその子たちの親が怖くて尻込みしたり、やったとしても、右耳から左耳で聞き流しちゃうような、全然心に届かないお説教もしないしね。そして、そのウワサを聞いた子が別の子にそれを話し、さらにたくさんのお悩みや告げ口がわたしの元に舞い込んでくる。それをわたしが解決する。それが続けば、いじめは自然となくなるわ。道のりは長いけど確実にしょ？」

「なる、ほど」

桜田さんの考えは少々短絡的なように思えた。

いじめっ子たちに恐怖を植え付け、叩きのめすことで支持を集め、その裏に潜む暗く、目立たないいじめすら自分の手で排斥しようという考えは素晴らしいと思ったが、それがうまくいくかどうかは別問題。言葉の上での綺麗事にすぎない、ともとれた。

それよりもぼくは、彼女のこの方式にひとつ、大きな問題があることに気がついた。

「でも、それじゃあ、桜田さんが」

「ん、なーに？ そんなに不安げな顔して。まだ何かあるんだったら、桜田のおねーさんに話してごらん。悩みもいじめもすばつと解

決しちゃうよ？パンチとキックと、そこそこの頭脳で」

「い、いえっ、何も。それと桜田さん。おねーさんって、ぼくたち、
同じ歳のはずですけど」

「あれー、そうだっけ？ ま、いいじゃない」

ぼくは彼女に『そのこと』を切り出そうとした。しかし、彼女の
屈託のない笑顔と、ちよつとバカっぽいそんな言葉を前にして、何
も言えなくなつて言葉を濁した。

輝きに満ちたその笑顔、その言動を、ぼくの無粋な言葉で曇らせ
たくない、そう感じたからだ。

「つと、そろそろお昼休みも終わりだね。君もわたしも授業に戻ら
なくっちゃ。さ、行こっか」

「いや、でも、この人たちは？」

「いいんじゃないの？ せつかくだからもうちよつとのびててもらお
うよ。その方が平和だし」

「そういうものですか」

「そういうものなのです。ささ、早く、行こっ」

桜田さんの嬉々とした後ろ姿を見つめ、ぼくは思う。

確かに、そんなことを続けていれば、おのずといじめの数は減つ
てゆき、いつかはいじめのない学校ができるのかもしれない。でも、
そうなったとき、桜田さん。あなたは一体どうするんですか？

いじめがなくなったあと、あなたの目の前にあるのは、その強さ、
その恐怖から、学校中から畏怖の念を抱かれ、悪意をもってつまは
じきにされるみじめな己の姿なのではないんですか？

あなたはこの結末に気づいていながら、あえていじめをなくすた
めに頑張っているんですか？

それとも――

ちなみに増山たちは、日がどつぷり落ちるまで、屋上の青空の下

に置き去りになっていたらしい。

「ご丁寧に桜田さんが彼らのもっていた鍵を奪い、階段側から鍵をかけたため、出ることができなかったからだった。

気の毒な話だとは思いつけれども、彼らのやっていたことを考えると、なんとも言えなかったりする。

うん、ざまあみる。

「はい、とうちゃくー」

「ちよつ、あの、足……速いです。ひい、ひいつ」

6時間目も終わり、皆がクラブ活動にいそむ放課後。ぼくは再び彼女に手を引かれ、南校舎の3階、その奥にひっそりと佇むそこそこ大きな教室の元に案内された。

生徒たちの教室がある北校舎とは、3階の連絡口を通して繋がっている南校舎。学校におけるほとんどの娯楽施設は北校舎にあることと、職員室や校長室や保健室など、先生たちがたくさんいる1階に、

図画工作室や視聴覚室のある2階と、あまり楽しめるような施設が設営されていないことから、校内を搜索範囲と定めた鬼ごっこや泥警などで、隠れ場所として使うことを除いて、授業時間以外で好き好んでこの場所に来る生徒は少ない。

そのはずだが、ぼくが立つこの教室だけは、授業外なものにも関わらず、話し声やちよつとしたざわめきが扉の隙間から漏れ出していて、いやに賑やかだ。どういふことなんだろう。

「あの。ぼくはなんでこんなところに」

「ま、ま。入ってみればわかるからさ」

桜田さんに促され、ぼくは家庭科室の引き戸を開けて中を覗いた。そこでぼくが見たのは、教室としては若干広めのその敷地の中で、

一方ではわきあいあいと、一方ではわいわいがやがやと遊ぶ生徒たちの姿だった。

20人近くいる生徒たちは皆、自分のやりたいことをしたいグループに分かれており、テーブルの上にトランプを広げて大富豪や占いをするグループもあれば、元々家庭科室に備え付けられているソーイングセットで、自分たちで持ち寄ったのであろう布や綿を使って、小さなぬいぐるみやワッペン、小袋を作るグループもあり、また一方では、椅子を教室の端に片し、机を障害物に見立て、新聞紙を丸めて作った棒のようなものでチャンバラごっこをするグループもあった。

裁縫にチャンバラごっこ、相反する遊びをしているものの、両方が両方のことを気遣い、距離をとって、相手の領域には入らないように配慮していた。どちらがどちらかを嫌がっている様子はなく、皆心から楽しそうなのが印象的だ。

「これは……どういうことですか？」

「わたしね、この手芸クラブの部長さんなんだ。知ってるでしょ？ しゅげい。小さなぬいぐるみとか、

小物とか、そういうのを作るやつ」

「それはまあ、人並みには。でもなんで桜田さんが部長をやっているんですか？」

「なんでかって？ 正義君、さ。ここの子たちを見て、何か気付かない？」

「何か……、ですか？」

「ぼくは家庭科室全体を見回し、少し間を置いてから答える。

「もしかして、桜田さんが助けた子たちの集まり、とか？」

「ごめーさつ。よくわかったね」

同級生の友達が少ない桜田さんが部長をやっている部活、となればそうなる他ないと思って答えたのだけど、まあ言わない方がいいだろうなあ。

「それもそつか。ま、それはともかく。知ってた？ いじめられっ子を助けるのつて、ただいじめっ子をやつつけるだけじゃ終わらないのよ。多くの人や先生が陥りやすい罠だから、しょうがないつていえばそれでおしまいなんだけどね。わたしも前はそうだったし。でも、ただその子をいじめるいじめっ子をやつつけただけじゃ、その子を助けてあげたことにならないの。何故だかわかる？」

桜田さんはホント、人が質問しているのに、そこに質問を被せるのが好きな人だなあ。悪いとは言わないけど、少しはこちらのペースも考えてほしいよ。

そう思つたのと同時に、ぼくはその問いに答えを出せず言葉に詰まった。

ぼくが答えられないのを見た桜田さんは言葉を続ける。

「ちよつと失礼なことを言うようでごめんね。君もそうだったと思うけど、いじめられる側つて大抵、ひとりぼっちで、悩みを相談できる友達もいなくて、だからこそ、どうしていいかわからない子ばかりなんだよね。いくらか例外もいるけど、ま、それは置いて、なら親や先生は、友達を作つて悩みを聞いてもらえばいい、つて軽々しく言うけれど、そんなの、簡単に出来たら苦労しない。だからこそ困つてる。つてのがみんなの本音。君も考えたこと、あるでしょ？」

「え、ええ。考えなかつたなんて言つたらウソになりますし」

「いじめっ子をやつつけたら、確かに一時はその子に対するいじめはなくなる。でも、一時は一時。その子自身が変わらなければ、ほとぼりが冷めたらまたいじめられるし、そうでなくても、他の子にいじめられてしまうかもしれない。自分の周りが火事の中で、ちよつと目の前の火の粉を振り払つても意味がないのとおんなじ。火事そのものを消さなくつちゃ、火の粉はすぐに自分の周りにまわりつくんだから。かといつて、わたしだつていじめられている子みんなを守らなきゃいけないのに、その子たち一人ひとりを見続けるのには限界がある。そこでわたしが考えたのが、この手芸クラブだつ

た、ってわけ。見ず知らずの赤の他人と友達になるのは難しいけど、同じいじめに遭ったっていう共通項があるし、痛みを知っている人間だからこそ、他人にやさしくできるし、わたしも精いっぱい仲立ちをする。みんながみんなそうだとは限らないけど、少なくとも、孤立している中で友達を作るよりかは簡単なはずだし、ひとりぼっちでいるよりは、ずっとずっと楽しいはずだもの」

「そういうもの、なんですか」

「そういうもの、よ。それはそれとして。いつまでもドアの前で顔を覗かせてないで。入るよ」

「え、え！？ あ、あ、あぁッ！」

桜田さんに背中をぽーんと叩かれ、ぼくは若干不本意ながらも家庭科室の中に足を踏み入れた。

突然のことだったのでバランスを崩して転びそうになったが、つま先に力を入れて踏ん張ったおかげで、なんとか転ばずに済み、ほんとと安堵のため息をついた。

「やつほー。みんなー、楽しんでるー？ って、あ」

「痛てっ！……ううう」

「ごっつ、ごめんねえ。つい」

踏ん張ったおかげで転ばずには済んだ。

が、そこで遅れて桜田さんが入ってきて、右手で軽くぼくを叩いたために（本人は触ったのではなく、ただ手を振り上げただけなのだろうが）、非常に微妙なバランスで立っていたぼくは、その衝撃でバランスを崩し、前のめりにあっけなく転んでしまった。

当然、教室内のほとんどの子に笑われたのは言うまでもないだろう。

「あつ、桜田さんだー！」

「桜田さん、こんにちわー」

桜田さんが教室の教卓前に歩を進める頃には、皆の興味の対象はぼくから彼女に移っていた。若干惨めな気がしたが、彼女の周りを

困う子たちの楽しげな雰囲気を見てみると、そんなことはどうでもいい気がした。

そんな桜田さんの元に三人ぐらいの女の子が駆け寄ってくる。制服のリボンの色からして、ぼくたちよりも一つ下の子たちだろうか。「ねえ、見てよ桜田さん。わたしたち桜田さんのために、うさぎのマスコットを作ったんですよ。ちっちゃいやつだから、携帯電話にもぴったりでしょ？」

「ミナちゃんに、ユウちゃんに、アマネちゃん。いいじゃん、いいじゃん。可愛くできたね。うん、ありがたく使わせてもらうね」

不格好で縫い目が色濃く出たうさぎのマスコットを大事そうに力バンの中にしまい、桜田さんは背中側で丸めた新聞紙を握っている男の子たちの方へと向き直る。

「桜田さん、こっちでチャンバラやろーよー。桜田さん用のやつもちゃんと用意してんだぜー」

「桜田さん、いつもすぐに壊しちゃうから、うんと丈夫なやつをさ」

「真人くんは謙吾くん。ごめんねー、壊すつもりでやってるんじゃないんだけど。でも、やるなら負けないよー！さあさあ、どこからでもかかってきなさい。みんなまとめてうちとつたりー！」

「おうよー！」

「50連敗だけは絶対に阻止してやるー！」

桜田さんは二人の少年の正面からの攻撃を容易くかわして、目にも止まらぬ速さで彼らの頭を新聞紙の剣で叩いて倒してしまうと、教室の隅っこで縮こまっている体の大きな男子生徒に声をかけた。

「桜田、さあん」

「繁田先輩。また同じクラスの子にいじめられたんだねー。繁田先輩、体おっきいんだから、そのおっきさを心のほうにも回さなくっちゃ、ね」

「ううう」

「だーいじょうぶ、繁田先輩のいいところはわたしが知ってるから。いつしょにがんばろうよ、ね？」

桜田さんの呼び声で教室内の生徒たちは、皆彼女の元に集まり、彼女を囲って親しげに話をし、ある子は彼女に贈り物を、ある子は自分たちの遊びに彼女を誘う。

正直なところ、桜田さんの言っていたことは彼女の妄言にしか聞こえないのだが、こうも和気あいあいとし、誰もが満足げともなると、誰がそれを妄言と言えるのだろうか。

妄言も推論も、形になつてしまえばそれは現実となるのだ。

個人的には、桜田さんよりもふた回りも体の大きい上級生が彼女に泣きつき、彼女がそれをあやす姿がちよっと面白くて吹き出してしまった。下級生のみならず、上級生からも支持を得ているあたり、彼女の人望の強さが相当なものだと窺^{うかが}える。

桜田さんなら、本当にこの学校からいじめをなくすことができるのかもしれない。それは『期待』という不安定な願望ではなく、『確信』という揺るぎのない確固たるものとして、ぼくの眼に映った。

だが、それゆえに、一抹の不安、いや疑問がぼくの脳裏を過ぎった。何故桜田さんがここまでのをやっているというのに、いじめは後を絶たず毎回毎回起こるのだろうか、と。

彼女が怠けているとか、上っ面だけの措置を施しているに過ぎないはずはない。そうだとしたら、あれほどまでに弱者から慕われることも、強者から恐れられることもないはずだから。

では、何故？ なぜこうなった？

下駄箱の中に無理やり押し込められた、給食の“食べ残し”と、そのせいでひどく汚れた『上履き』を見据えながら、ぼくはやりどころのない怒りに震え、不可思議な疑問に頭を抱えた。

それは、桜田さんと出会ってから5日ほど後のことだった。

朝、普通に登校して、意気揚揚と下駄箱に手をかけたとき、不可思議な異臭と悪寒に気づき、ぼくは恐る恐る下駄箱の取っ手に手をかけ、そーっと開いた。

そしたらこうだ。まったく、さっきまでのさわやかな気分が台無しだ。嫌になる。ごみくずやパンとかそういう固形のものならまだよかった。片付ければ事足りるわけだし。

しかし、なんなんだよもう。上履きにかかっていたのは、汁々の肉じゃがに、わざわざ固形の具をぐちゃぐちゃにして下駄箱じゅうにぶっかけたみそ汁。

全部、昨日の給食のメニューだ。

肉じゃがはまだしも、わざわざ具をぐちゃぐちゃにするぐらいだ。やったやつが悪意の強さには辟易する。

「おっ、正義じゃん。おはよっ。どうしたの、そんなうかない顔してさ」

「森元、くん。おはよう」

意気消沈しているぼくに誰かがおはようと挨拶をかけてきた。

その声に聞き覚えがあったので、ぼくは声のした方に向き直り、あいさつを交わす。

そこには、ぼくの前髪ほどではないものの、「普通」とはだいぶかけ離れた、赤髪の少年の姿があった。

彼は森元雅人。もりもと まさとあの家庭科室で出会った、同じクラスの友達だ。

いじめられ、あの場所にやってきた理由がぼくと似通っていたことから、すぐに打ち解け、仲良くなった。

ただし、彼の場合はただでさえ恰好のよい容姿と、それを引き立てる赤髪、そしてその容姿には全くそぐわない、気の弱さと運動神経のなさの原因だった。運動全般は点でダメな彼だが、ユニフォームを着せてサッカーボールを蹴らせてみたり、ヘルメットを頭に被

せてバットを持たせてマウンドに立たせると、お世辞ではなく本気で絵になるところがまた、他の男子から毛嫌いされる要因だったのだろう。

「ひどいね、これは。肉じゃがの残りに、具をぐちゃぐちゃにかき混ぜてこぼしたみそ汁。洗わないと履けないじゃん。っていうか、洗っても臭いが」

「それ以上言わないで。わかってる。とりあえず職員室でスリッパ借りてこなくちゃ。あ、でもこれを洗わなくちゃいけないし」

「ああ、スリッパなら僕が借りてきてあげるから、その間にトイレのあたりでも洗っておいでよ。」

急がないとホームルーム始まっちゃうよ」

「あ、ありがと。森元くん」

「ううん、気にしないで。困った時はお互い様だつて」

森元くんが職員室にスリッパを取ってきてくれる間、ぼくは近くにあったトイレの前の水道で、上履きについた汚れを洗い流すことにした。近くとはいえある程度の距離は歩かないといけなくて、白い靴下の裏は汚れですっかり黒ずみ、洗っている最中、何度もトイレの前を通りかかる生徒に冷やかされたが、気付かないふりをし、無視した。

いちいち反応していると、鬱になってしょうがなかったから。

なんとか汚れを取ることはできたが、森元くんの言ったとおり、そこから発せられる臭いはどうにもならない。しょうがないことだと思い納得はした。納得はしたけど、クラス中の視線という視線が痛くて辛くてしょうがなかった。

今までのぼくなら、ただ泣き寝入りするだけだっただろう。もしも犯人を見つけ出せたとしても、相手に返り討ちに遭うのが怖くて、手を出さないだろうから。

でも、今は違う。今のぼくには、いや、ぼくたちいじめられっ子

たちの前には、『桜田 瞳璃』という希望がある。もう報復を恐れてびくびくする必要はないし、守られているだけじゃダメだ。助けてもらわなくても大丈夫だって示さなくちゃ。

それが彼女に対する、一番の恩返しだと思ったから。

放課後。僕は授業後すぐ、嫌な視線から逃げるように教室を抜けると、下駄箱に上履きを入れさも帰ったように見せかけて、昇降口のすぐ近くにある、掃除用具入れの中に隠れて様子を窺い、犯人の証拠を掴もうと考えた。

犯人を見つけて、そいつをどうこうできるか、とは特に考えていなかったが、まあ大丈夫だろう。何せ、ぼくたちにはあの桜田さんがいる。ぼくでダメでも彼女なら。

ああ、いや。最初から彼女に頼る姿勢じゃダメだよな。いや、でも。ぼく以外にも陰湿ないじめに苛まれている子はたくさんいるはず。これはぼくひとりの問題じゃない。その子たちのためにもこうして証拠を掴むのが大切なんだ。

日が陰りだし、ほとんどの生徒が下校する午後五時台。

待てども待てども下駄箱の近くには誰も現れず、ぼくの中に焦りと迷いが生じていた。

よくよく考えてみれば、今日下駄箱の中に給食の残りを入れられたとして、それが明日も続けて入れられる保証はないのだ。

夕暮れ時で辺りも暗くなる中、ただでさえ薄暗い掃除用具入れの中はすぐさま真っ暗闇と化し、その闇はぼくの心の中に暗い影を落とすようで、怖くてたまらない。

こんな恐ろしい場所に隠れようと考えたやつを呪ってやろうかと思っただが、程無くして、それを発案したのは他でもない自分だったことに気づき、無駄であることを悟った。

とりあえず、やりどころのない恐怖と怒りをため息に変えて発散することにする。

そんな時だ。掃除用具入れの取っ手に手をかけ、戸を開けようとするやつがいる。

ぼくは反射的に中側の取っ手を引っ張り、抵抗するが、戸の先の人物は強い力で取っ手を前に後ろに引き付け、ぼくを用具入れの中から引きずり出そうとする。

今戸を開けようとしている人物が犯人であるかどうかは分からない。けど、このまま引きずりだされるのはまずい。ならば、やることはひとつ。

「う、うおおおお、るうあああああ！」

「！？　へ、けっ」

ぼくは相手の裏をかいた。やつが無理やりこの用具入れを開けようとしているのなら、あえて開けさせてしまえばいい。

相手が取っ手を後ろに引っ張り、再び押そうとするタイミングを見計らって、ぼくは思いっきり腕に力を入れて戸を押し、勢いよく用具入れを開け放した。それまで戸を引っ張っていた相手は、その勢いに文字通り出鼻をくじかれ、情けない声をあげてその場に倒れこむ。

ぼくは恐る恐る用具入れの中から顔を出し手を出し、足を出して、外の様子を伺った。

「……森元、くん！？」

用具入れの戸の先には見知った顔があった。あの森元くんだ。彼は夕日に映えたその赤髪の上からぶつけた患部を痛そうにさすっていた。

「いて、ててて……っ」

「森元くん！　なんでぼくがここに隠れてることが分かったの？　っていうか、なんであんな強引な開け方したの！　あ、いや、それよりも、なんで君がこんなことを」

「『なんで』が無駄に多いよ。三回も言っちゃって、そんなに大事なこと？　ま、いいや。質問されたからには答えるよ。ひとつ。下

駄箱辺りを見張るならここが一番周囲を見回せるし、何より隠れるのにも都合が良さそうだから。ひとつ。強引なんて人聞きの悪い。君が力を入れて開けられないようにしたから。僕だって、君が戸を開けるのを邪魔しなければ、あんな風になんてしなかった。さいご。桜田さんに”頼まれたから”だよ。帰り際に道ですれ違ってさ。桜田さん心配してたよ！。下駄箱にゴミを入れられるなんて……って。他にも助けなきゃいけない子が大量いるからって、僕に君の様子見を頼んだんだ。そのあとで先生に捕まって、宿題の居残りで遅くなっちゃったけどさ」

宿題ぐらい昨日のうちにやろうよ森元くん……じゃ、ない！ な、なんだって！

「どうしたの？ 蛙がへビに睨まれたみたいな顔して」

「そんなの……おかしいよ。だってばく、桜田さんにまだこのこと、話していないもん」

「えっ、おかしいな。でも桜田さんは、ばくがその話を切り出す前から君を心配してたよ。だから……」

「も、森元くん！？ ど、どうしたのさ森元君」

何が起こったのかさっぱりわからない。いきなり森元くんが気を失って、前のめりに倒れこんでしまったのだ。

誰かが森元くんの背後に忍び寄って襲ったようだけど、それなら目の前で話をしていたばくが気付かないはずがないし、なにより彼の背後には今、誰もいない。

意味が分からない。さつき森元くんに用具入れを揺すられたとき以上の恐怖に背筋が凍った。と同時に、ばくは彼の二の舞にならぬよう身構え、体中の感覚という感覚を研ぎ澄ませ、敵の襲撃に備えた。

しかし、ばくの視界の前には何も映らず、聞こえる音といえば、時々吹く風の音程度。瞬きする一瞬さえ何時間にも感じられるほど、ばくの体は緊張と恐怖で固まっていた。

遠くで何かが転がる音がする。それが人の足音やその他でないことは、頭では分かっていた。しかし冷凍庫に長時間入れられ、がちがちに凍ったバナナのように固くなったぼくの間神経はその音に反応せざるを得ず、ぼくは音のした方向に体ごと向け、その先を凝視して警戒を強めた。

そして、それがいけなかった。

『敵』はその姿を視認するよりも早く、ぼくの背後に回り込み、背中越しだったのではつきりしなかったが首筋を強く叩いて、ぼくの意識を刈り取った。

稲妻のような激しく素早い痛みに耐えながら、意識が薄れていく中で、ぼくは『敵』が誰なのかを確認しようとした。しかし、既に『敵』はぼくの視界からはとくに消えていて、その姿を確認することはかなわなかった。

男か女なのか。大きいやつか小さいやつか。そんなことすらも分からないことを後悔しながら、ぼくは地に伏して意識を失った。

ここは、どこ？ ぼくは……だれ、だっけ？ あ、いや。それを忘れちゃまずいよなあ。

どれだけ時間が経ったのだろうか。目を覚ますと、ぼくは真っ白な天井を見据えていた。

首を左右に動かして辺りの様子を窺う。頭の下にふわふわとした感触のよい枕が置いてある。

体を起こして周囲を見回すと、体に白い掛け布団がかけられていた。

「ああ、気がついた？」

ぼくを気遣うやさしげな声に、白い白衣の女の人。そうか、ぼく

は保健室に連れてこられたのか。

なるほど、だんだんと思い出してきたぞ。ぼくはあの時、何者かに首筋を叩かれて気を失って、

気がついたらここに運ばれていた、ってわけだ。でも、待てよ。だったら。

「あの、先生。ぼくは、なんで、ここに？」

「ここが、保健室がそういう場所だからに決まっているじゃない。なあに？ 君には保健室は哲学の勉強したり、君の乗っかっているベットの上でプロレスをやるような場所に見えるの？」

「いや、そうじゃなくて。なんでぼくはここで寝てるのかってことです」

「ああ、そういうこと。じゃあ、君を連れてきた子に聞いてみれば？」

「聞いてみれば、って。……いるんですか？ ぼくを運んでくれた人が」

「ええ。そんなに心配ならこの中で待っていていいのに、って言ったのだけど、教室の前で待つって聞かないから。その引き戸の先で待つてるんじゃないかしら」

「そうですか。それは、どうも。あ、そうだ……もうひとつ」

「なあに？」

「ぼくが運ばれたっていうんなら、もう一人、ここに運ばれた子がいませんでしたか？」

「ええ、いたわよ。けどその子、君よりも早く目を覚ましたみたいだから、私に言伝いさづてを頼んで先に帰っちゃったわ。『足手まといになっちゃったみたいで、ごめんね。』って」

「お礼なんていいわよ。それが私の仕事だもの。それにお礼なら、あなたとそのお友達を運んできた”彼女”に言ったらどうかしら？」

「”かのじょ”ですか」

保健の先生は、ぼくを運んできた子のことを”彼女”と言った。

ぼくの知っている女の子の中で、そんなことができる子は一人しかいない。引き戸を開けて外に出た瞬間、自然とその人の名前を口走っていた。

「桜田……瞳璃さん」

「ごめーさつ。調子はどう？」

思ったとおりだ。桜田さんは保健室の壁に寄りかかり、ぼくが目覚めるのを待っていたらしい。

彼女はぼくが出てきたことを確認すると、安堵のため息を漏らしてぼくの肩を掴む。

「もう大丈夫？ 歩ける？ 君のお家まで送ってあげようか？」

「いえっ、ひとりで歩けますから。でも」

桜田さんはぼくの顔を見るなり心配そうな面持ちでぼくに詰め寄った。

ぼくなんかのことを過度に心配してくれる桜田さんのその態度が嬉しかったが、

そのことに関する感謝の言葉よりも先に、ある疑問を口にした。

「なんでぼくが、ぼくたちがあそこで倒れていることが分かったんですか？」

彼女はぼくがその問いを口にするのを分かっていたのか、笑いながらぼくの顔を見て答える。

「はは、何をいまさら。わたしはだあれ？ いじめっ子たちから君たちいじめられっ子を守る”ジャンヌ・ダルク”、桜田 瞳璃さんですヨ？ それぐらいのこと、わかって当然なのです。でも、今日はその、ごめんね？ 校内を回って、君たちのところに来るのが遅れちゃったみたい。わたしがあの場所についた時にはもう……、ごめん、ね」

「いいですよ、そんなの。桜田さんは何も悪くないですから」

「そ……っか。ありがと。じゃあもう帰ろっか。ほら、君の靴、持ってきてあげたから。今から昇降口に向かって、入り口が閉まっ

てるから出られないしね」

「ありがとうございます。そうですね、帰りましょう」

ぼくは桜田さんに手を引かれ、南校舎側の入り口から学校を出て、近くの曲がり道で彼女と別れた。

本当は他にも彼女に聞きたいことはたくさんあった。あったものの、彼女の弁明の際の息苦しそうな顔を見てみると、とてもその先のことを質問する気にはなれなかった。

前編（後書き）

短編で書こうとしたら短編の許容文章量をオーバーしてしまったので、

二編に分割しました。

後編

そして次の日。予想通りぼくの下駄箱の中には、昨日の給食の残りが詰め込まれており、上履きの白い部分は所々濁った黄色に染まっていた。黄色に染まっているのはおそらく昨日の給食の献立がコンポタージユだったからであろう。

当然、ぼくはそれに対し強い嫌悪感を示したものの、それ以上に下駄箱に入れるためだけに、給食のコンポタージユを残して隠し持っておくという犯人の根気というか馬鹿というか異常ぶりが目につき、

怒りを通り越して少々呆れていた。

しかし、そもそもぼくはいじめられていた側だ。恨まれるいわれはない。ならば、見張っていたぼくや森元くんを闇討ちしてまで、こんなことをする理由はなんなのだろう。ぼくがひとりで考えていたところで、分かるはずもなかった。

「ありがとね、森元くん。こんなことにいちいち付き合ってくれてさ」

「いいっていいって。とつとと犯人を見つけ出して桜田さんに引き渡さなくっちゃ。じゃあ、手筈はさつき言^{ては}ったとおり」

「りょーかい、任せて。へへへ、なんだかスパイ映画みたいでわくわくするなあ」

「スパイ映画……とは違うと思うけどなあ、これ」

その日の放課後。こんな馬鹿げたことをしている奴の面を拝もうと、ぼくは再び昇降口の周辺に身を隠し、様子を窺っていた。

前回の反省から、掃除用具入れに隠れるのはやめ、ぼくは下駄箱から死角になる柱を探してそこから様子を窺い、森元くんにも最初

から協力を仰ぎ、ふたりがかりで周囲を見張ることにした。

「言葉でコミュニケーションを取るのはまずいのではないか」と考えたばくは、森元くんと話し合い、ばくたちはお互いの隠れている場所が分かるような位置に立ち、怪しいやつがやってきたら柱の影から手だけを出して、ハンドシグナルで合図を取り合うという、古典的かつ声なしでコミュニケーションを取ることに決めた。

それから20分後。不意に森元くんの右手が柱の陰から現れ、彼の手が、指が左方向を指し示す。ついにきたかと、ばくは勇んで彼の指し示す方向に首を向ける。

しかし、彼の示した方向には人っ子一人見当たらない。とっさのことで方向を間違えたのかと思い、森元君のほうに視線を戻す。すると、どうだろう。森元くんの右手は、左側を向いたまま、力なく床に倒れているではないか。

ばくは困惑する頭でなぜそうなったのかを必死になって考えるが、その答えが出ることはなかった。

何故なら、頭の中で答えを探そうとしたその瞬間、後頭部に強い衝撃が奔り、ばくの意識はそこで途切れてしまったからだ。

「お目覚め？調子はどう？」

「ああ、はい。……なんとか」

「そ。起きてすぐに立ち上がれるぐらいだし、もう大丈夫ね。今日はどうしたの？保健室の前であおむけになって倒れてるだなんて。喧嘩に勝った帰り？それとも負けた帰り？ま、それはともかく、君のお友達の子も無事よ。まだ眠ってるけど」

「おともだち……？ああ、森元くん！せ、先生、大丈夫なんですか！？森元くんは！」

「聞いてた？私の話。大丈夫よ。眠ってるだけ」

目覚めはまたも保健室のベッドの上だった。しかも今度是一緒に見張っていた森元くんも、向かいのベッドですやすやと眠っている。ぼくらの企ては失敗に終わったようだった。

けれど収穫もあった。ぼくと一緒に気絶させられてここで眠っていると言うことは、少なくとも森元くんはシロだ。犯人であるはずがない。そうであって本当に良かった。

「う、ううん」

「あつ、気がついた！森元くん、大丈夫、森元くん！」

「む、む、む。大丈夫だよ。なんとかね」

「でも、こうしてぼくも森元くんも保健室で倒れてるってことは」

「ごめん、相手の顔は見られなかった。後ろから殴られたか蹴られたで意識をなくしちゃって」

やっぱりそうだったか。でも、あきらめちゃだめだ。

今日がだめでも明日がある。明日がだめでも明後日がある。大切なのは、あきらめない強い心だ。勝負つてのは地面に倒れこんだときに決まるんじゃない。心が折れて、立ち上がれなくなった時が負けなんだ、

桜田さんの受け売りの言葉を頭の中で反芻する。まだ負けたわけじゃない。諦めるわけにはいかない。

ぼくたちは保健の先生にお礼を言つと、まだ少し痛む体を二人で支えあいながら校舎を後にした。

先生の言う「保健室の前に倒れていた」という言葉が少し気になったが、それはひとまず頭の片隅に追いやり、森元くんと二人で今後の対策について考えることにした。

それから何日も何日も、ぼくと森元くんは、姿の見えない謎の犯人に対し抵抗を続けた。

前二回の反省を踏まえ、ただ隠れて見張るだけでなく、下駄箱の中に触るとくつつく鳥もちや、色落ちのしにくい塗料の入った水風

船を仕込んでみたり、上履きの代わりにネズミ捕りを仕掛けて一泡吹かせてやろうと画策したのだが、どういうわけか、犯人はなんなくそれを見破ってしまうため、

何の意味も成さなかった。

それどころか、仕掛けがきちんと作動するかどうかを確認しに行った時物陰から襲われたり、ひどいときは、逆にぼくたちが仕掛けにはまって自分の服や上履きを汚したり、ネズミ捕りに手を挟まれるのたうちまわるという、どうしようもなく情けない姿まで曝してしまっていた。

作威的なものを感じる。犯人は一体何が狙いなんだ。わけがわからないよ。

そんな私たちごっこから状況が大きく変わったのは、犯人を探し始めて10日ほど過ぎた朝だ。

ぼくは何者かによって汚された上履きを履き、ランドセルから教科書や筆箱を取り出し、1時間目の授業の準備をしていた。

もちろん、履きたくて履いているわけじゃない。今日に限って、貸し出し用のスリッパが全部なくなっていたのだ。ぼくに嫌がらせをしているやつの犯行であることは間違いないだろう。

とはいえ、あんなに嫌だと思っていた異臭も、履いたときのぬめぬめ感にもすっかり慣れてしまった。人とは、人の中にある『慣れ』という感情とは不思議なものだと思う。

しかし、それに慣れたのはぼくだけで、一緒のクラスで授業を受けるクラスメイトたちはそうはいかない。当然だ。自身の周囲に異臭を放つやつが近くにいて、しかも、弱虫でいじめられっ子のぼくが原因ときた。襲わない理由などない。

最初にからんできたのは、以前ぼくの頭にスプレーをかけようと

したあいつだ。彼はわざとらしく鼻をつまみ、鼻声でぼくの前にやってきた。

「あー、あー、くせえ、と思ったらお前かよ、ガイジン」

「そうだよ。悪かったね、くさくて。取り替えてくる」

ぼくは悪態についてそう答えた。以前いじめをかけてきたやつに仰々しくする必要などないと思ったからだ。

とはいえ、彼に指摘されて、”確かに人からしたら迷惑だな”と罪悪感を感じたので、席を立ち、

職員室にスリッパ以外の何かを借りに行くことにした。

だが、ぼくが椅子から腰を上げ、立ち上がったその瞬間、彼はぼくの胸ぐらをつかんでぎりぎり締め上げた。

予想の範疇内の行動だったが、痛いものは痛いわけで、ぼくは声を上げた。

「調子こいてんじゃねえよ！ 弱ええくせに、ガイジンのくせに！ 気に食わねえんだよ！ てめえみたいなのが一緒のクラスにいるっただけで！」

「なんだよ、なんだよ。いじめるネタがないからって、今度はぼくが存在そのものに因縁つけるのかよ。」

ぼくがいて、何か君に悪いことしたってのかよ。うっとおしいんだよ、お前」

けれど、もう黙っているのもなすがままにされるのも嫌だった。

ぼくはそいつの胸倉を逆につかみ返してまくしたてる。

「分からないのか？ ぼくはもう、お前なんて怖くないって言うてるんだよ。どうしたよ？ やってみろよ！ いつもみたいにぼくを殴ってみろよ、ぼくを蹴りつけてみるよ！ 何度だって殴りつければいい。ぼくは全然かまわない。けどな、そのかわり。ぼくはお前の何倍も殴りつけてやる！ 蹴ったんなら、その何倍もやり返して蹴ってやる！ もう一度言うぞ、ぼくはお前なんて……怖くないんだ！」

ぼくは胸ぐらをつかむそいつの右拳を、自分の左手でぎりぎり握り返した。左手に力を込めるほど、口から紡ぎだされる言葉に力がこもる。言葉に力がこもればこもるほど、左手に入る力も勢いを増してゆく。これが相乗効果ってやつらしい。

やつの顔が苦悶に歪むのが見えた。しかし、それはほんの一瞬で、すぐに怒りに震える鬼の形相に変わった。

「上等だあこんにやろう！ ぶちのめしてやるよ、てめえなんかあああああ」

やつはぼくの胸ぐらを離し、一人分の距離をとると、今にも殴りかかるうとするボクサーのような構えをとり、振りかぶって握り拳をぼくに向けた。

それにつられてぼくも拳を握ってやつに向ける。

——待ちなさいッ！

しかし、その拳はやつに届くことはなかった。やつの拳もぼくには届かなかった。

どこから現れたのか、拳と拳の間に桜田さんが割って入り、両方の拳を受け止めたのだ。

桜田さんは両の拳を受け止めたまま、ぼくのほうに顔を向けて、心底心配そうな面持ちで声をかけてくる。

「大丈夫……だった？」

「え、ええ。なんとか」

桜田さんの不安げな顔を見た瞬間、どうしてだか分からないが、ぼくの怒りは急速に冷め、拳に込める力は一気に緩まった。

しかし、向かいのあいつはそうはいかない。彼は激しい口調と表情でぼくと彼女を威嚇する。

「何しやがんだ！ どきやがれ！ どきやがれってんだよ」

彼女は自分を威嚇する彼に向かい、冷淡で、その中に激しい憎悪が込められた目つきを向けた。

その目つきにたじろぎ、恐れをなしたのか、

彼もまた力を抜くと、そそくさと自分の席へと立ち去り、縮こまる。桜田さんはぼくの右手を両の手で包み込んで胸の前に置いてこう言った。

「ダメ、だよ。あんなことしちゃ」

ダメ？　ダメって何だ。そりゃあぼくの力だけじゃあいつはどうにもならなかっただろう。それは分かったことだ。でも、それで何もしないんじゃないですか。おかしいですよ。

桜田さんはそんなぼくの言葉を遮り、肩を掴み、ぼくと目線を合わせてこう言った。

「わかってたんじゃないの？　自分の力じゃ、あの子には勝てないって。自分の力でいじめっ子に対抗するのはいいことだよ。だけど、その理由が怒りにまかせて、ってのはどうかと思うな。前にもいったじゃない。中途半端に力を振るっても、やられてもっとひどい仕打ちを受ける、って。君のそばにはわたしがいる。君が敵わないならわたしが代わりに戦ってあげるから。あなたは何も気負わなくていいんだよ。……ね？」

それはそうだ。間違っていない。確かに、ぼくの力であいつを殴ったとして、やつらを倒せただろうか。不意打ちで拳の一発ぐらいなら入れられただろうけど、もう一発を入れたら自信はない。きつとやられていただろう。

彼女は優しくかった。ぼくを殴ることもなく、激しい口調でまくし立てることもなく、ぼくの目を見据え、ただぼくの心配だけをしてくれた。

でも、ぼくは優しく抱きとめてくれる桜田さんの腕をあえて振り払った。

「でも、だからって桜田さんの助けを待っているだけじゃあ、ぼくは何も変わらないじゃないですか！　そりゃあ桜田さんがぼくたち

を守ってくれるのは頼もしいです。それだけで勇気が出る。でも、それだけじゃあダメなんです。ぼくたちは強くならなくちゃ、強くならなくちゃいけないんです！ 守られる側から、守る側にならなきゃダメなんです！」

だからこそ、”守られる側から守る側にならなければ”。ぼくはそう彼女にそう言った。今のぼくの正直な気持ちだ。

それを聞いた桜田さんにはにこりと微笑んで答える。

「そっか。そう、だよ。うん、うん。いい心がけだ。わたしもううれしい。ご、ごめん、ね。わたし、邪魔しちゃったかな。あはは、はは」

「いえ。ぼくこそ、変に出しゃばっちゃって」

桜田さんはそのまま笑って教室を出て行き、ぼくはその後ろ姿を見送った。

笑ってはいた。いたのだが、その笑顔は……どうしようもなく曇っていた。

その日の放課後。ぼくは桜田さんを南校舎の屋上前に呼び出した。ぼくから彼女を誘うことなどなかったからか、少し戸惑っていたのだが、例のいじめの件で相談がしたい、と付け加えると、二つ返事で承諾してくれた。

階段の一番上の段に座り込んで待っていると、彼女はすぐにやってきた。

「ごめんねー、待たせちゃったかな？」

「いえ、大丈夫です。ぼくも今来たところです。上のほうにどうぞ」

ぼくは桜田さんを屋上に通じる非常口の前にある踊り場に誘い、向かい合った。

いざ彼女と向かい合うと、どうにも恥ずかしいというか、なんだ

か不思議な気持ちになり、言葉が出ない。

もしかしたら、これが”好き”ってやつなのかもしれないが、とりあえずそれは今は置いておこうと思う。

今、彼女に話そうとしている事柄は、そういう類たぐいの話とは、まったく別の話だ。ぼくが向かい合って何も言えないでいると、彼女がそんな空気を察して読んだのか、ぼくより先に口を開く。

「わざわざこんなところに呼び出してさ。聞かれたら困るようなことなの？」

「そ、それは……」

ぼくは言葉を継げずにいた。ぼくの言いたいことは決して難しいことなどではない。けど、簡単だからこそ言えないことだつてある。頭の中で言いたいことは決まっているはずなのに、それを言葉にして口に出すのが怖いのだ。ぼくの考えていることが現実になるのが怖くて、口を開くのをためらわせてしまう。

そんなぼくを見て、桜田さんは言う。

「言うのが怖いのか？ 大丈夫。わたしはここにいるよ。桜田瞳璃はここにいます。安心して。怖いことなんて何もありませんよ。あつたつて、わたしが吹き飛ばしてあげるから。ね？」

彼女は、先ほど教室でしたときのように、ぼくの手を包み込むように握り、話をするよう促す。

桜田さんはどこまでも優しく、そして暖かい。ぼくの手を握る彼女の暖かさが心地よかった。

だから、だからこそ、ぼくの体はがくがくと震えた。寒いからじゃない、この先が怖いからだ。

ぼくは歯を食いしばり、意を決すと、ときどきもりながらも、考えたことを口にした。

「あの、あの。ぼ、ぼ、ぼ……ぼく、犯人を見つけたんです、靴の一件のこと、なんですけど」

「へえ。さすがは正義君、だね。それで？ 誰だったの？ そんなこ

とする酷いやつは。わたしがとつちめてやんなきゃね」

「それは、それは、それは」

この人は分かっていると言っているのだろうか？ それとも、ただはぐらかそうとしているだけなのか？

わからない。わからないけど、ここまで言ってしまったからには、その先の言葉を言わないわけにはいかない。

——— そいつの名前は、さ、さ、桜田…… 瞳璃！

ぼくは、体中の勇氣という勇氣を振り絞って、消え入りそうな声でその名前を口にする。こんなところで絶対に口にしたくなかったその名前を。

ぼくは言い終わると同時に、目をつぶって頭を垂れた。前を向いているのが怖くて怖くてしょうがなかった。

桜田さんは驚きこそすれ、大きな声を上げることはなかった。それどころか一呼吸置いたあとにふつと笑い、いかにも余裕ありげに口を開き、言葉を紡ぐ。

ぼくが予想していた答えの、まったくの逆の言葉を。

「そつ、か。そう、きたか。そりゃあそう、だよ」

——— なんて……？

「そりゃあそうだよ。あんなこと……。気づかれずに背後に回って一撃なんて、普通の子はやれるわけないもんね。どこの暗殺者のやることよ、そんなの。ばっかみたい」

——— なんて？ なんて……？

「むしろ今まで気づかれなかったよがおかしかったよね。それとも、あれかな？ 知ってて何も言わなかったの力ナ？ やさしいね正義君は。いいことだとは思っけど、言いたいことは言いたいときに言っただけがいいと思うよ」

「待ってください！ 桜田さん！」

——— どうして、どうして…… 否定してくれないんだ！？

——— ”わたしはそんなことしない” って、”冗談きついヨ、正義

君”って！

——”あははは、そんなわけないじゃない”って！

——いつもみたいに、明るく、澄んだあの笑顔で！　なんで！
なんでなんだよッ！

ぼくはいつの間にか泣いていた。考え得る最悪の事態が今、目の前で起こってしまったから。

桜田さんはぼくの手から自分の手を離して背を向けた。

「むかし……って言っても、三年か四年位前かな。どこかの田舎の小学校に、一人の女の子がいたんだ。その子の前には誰も友達がいなくて、いつもさみしくて、からっぽで。あるときは教室の隅っこで、あるときは図書室の隅っこで、またあるときは校舎の裏で一人で泣いてた、みじめな女の子」

それはぼくに聞かせるための話ではなかった。輝きのない、死んだ魚のような目をしているし、なにより言の葉に感情が込められていない。

桜田さんが話す身の上話は、ただただ口を動かしているだけの、留守番電話なんかが発するような、無機質で機械的な声も合わさり、非常に凄惨なものに感じた。

ただ泣いているだけの日はまだ良い方で、汚れたモップで頭をぐしゃぐしゃと叩かれたり、トイレに入れば個室の上から水をかけられ、体育の時間着替えた後に服を盗まれ、グラウンドに放り投げられたり、教科書に『死ね』とか、『お前なんて消えちゃえ』って落書きされ……。毎日毎日がそんなことの繰り返しだった。

助けてくれる先生も、心配して励ましてくれる両親もいた。でも、先生は頑張れ頑張れと励ましの言葉をかけるだけで、親は親であまりにいじめが酷いせいか、自分の世間体を気にして、わざとその話題に触れないように、あえて無視してまだ幼い桜田さんにそっぽを向いたのだ。ひどい、あまりにも酷過ぎるよ。

—— なんてわたしだけがそんな目に遭うの？

—— 人はみんな平等なら、なんてわたしだけがいじめられるの？
夜空を仰いで天に答えを求めども、その答えが返ってくることはなかった。

桜田さんはいじめられ続けることにも慣れ、いつしか涙も枯れ果てた。慣れればどうってことはない。嫌なことからは逃げていればいい。目を背けてさえいればいい。

そう自分自身に言い聞かせ、彼女の心は黒ずみ、歪んで行った。

そんなある日のこと。桜田さんがいつものように登校すると、校舎裏で一人の女の子が三人の上級生に囲まれている場面に出くわした。

女の子は体の大きな男の子に囲まれて、怖さにただただ震えていた。どれだけ涙を流しても、どんなに声を枯らして助けを求めても、彼ら是一向にそれを聞き入れようとはしない。桜田さんの目にはむしろ、彼女の目にはそれを見て楽しんでるように映った。

その中のひとりが彼女の長いおさげの髪をぐいぐいと引っ張り、女の子はわんわんと泣き叫ぶ。周りには自分を除いて誰もいない。

桜田さんの中で何かが切れた。彼女は思いつきり声を上げて、おさげを引っ張る男の子に体当たりを仕掛けた。ひるんだところでＴシャツの袖を掴んでがん、がん、と校舎の壁に男の子を叩きつける。叩き付けた男の子にも、その周りの二人にもさんざん殴られ蹴られ続けたけど、桜田さんはそれをやめなかった。ただ目の前の彼女を救いたい一心だった。

そんなやり取りが続いて、いつしか男の子たちは根を上げて立ち去った。桜田さんの根勝ちだ。

だが、桜田さんの体はいじめられていた女の子以上にぼろぼろになった。とても女の子には見えないような顔つきで、顔は真っ赤に腫れ上がり、体は青あざでいっぱいになっていた。

こんな顔じゃ、登校したらいつも以上にいじめられるんだろうなあ。なんてことを考えていた桜田さんの前に、先程の女の子が駆け寄ってきた。

おさげの女の子は涙目に涙声で桜田さんに対し、感謝の気持ちを『ありがとう』の言葉に代え、彼女に肩を貸して彼女を保健室へと連れて行った。

桜田さんの体中から痛みが引いた。気がただけで、本当はまったく引いてなんかいなかったけれど、その言葉を聞いたことへのうれしさで、痛みなんて吹き飛んでいたのだ。

自分と同じような目に遭っている子が、この学校に大勢いることを桜田さんが知ったのはそれからすぐのことだ。

自分のことで精一杯で他の子にかまっている余裕なんてなかったから、当然のことだったろう。

それからだ。桜田さんはいじめられている子を見つけると、後先考えずに向かっていくようになったのは。今でこそ連戦連勝、負けた姿なんて見たことのない桜田さんだったが、この頃は勝つよりも負けることのほうが多かったらしい。

彼女は厳しく、激しく自分を鍛えるようになった。いじめっ子たちに負けないために、あの言葉をもう一度聞きたいがために。

それを繰り返すうち、桜田さんは『いじめられっこをいじめっ子の魔の手から救う正義の味方』と呼ばれ、いじめられっ子たちから崇められるようになっていた。

たくさんの上級生相手でも一歩も引かず、殴られても蹴られても臆せず、逃げずに相手に向かっていく女の子だ。そう見えて然るべきだとぼくは思う。

桜田さんの周りにはたくさんの子たちが集まるようになった。それが彼女の幸せになったのだ。

——桜田さんの話はここでようやく途切れる。

ぼくは次の言葉を待つが、彼女はそれ以上口を開こうとしない。辺りに何とも言えない気まずい空気が流れる。

「あ、あの」

「でも、ある日気づいたの。その幸せには終わりがあることを」

場の空気を和ませようと何か言おうとしたぼくの言葉に、自分の言葉を被せる桜田さん。

この人は本当に、人の言葉に自分の言葉を被せるのが好きだなあ。意図してやってるのか、天然なのかは分からないけど。

「倒して倒して倒し続けて、タチの悪い者を除いていじめっ子はほとんどいなくなった。倒すべきいじめっ子がいなくなれば、ヒーローなんて必要なくなってしまう。それどころか、勝手気ままに暴力行為を行って回る危険な子として、一般生徒や先生はおるか、助けた子たちにも恐れられてしまう。」

それもあるし、もともと生粋のいじめられっ子だったわたしに、いじめられっ子以外からは恐怖の暴力女としか映らなかったわたしに、友達なんて、できるはずがなかった。一度、助けた子たちに助けを乞おうと考えたこともあった。しかし、彼らにとってのわたしの存在はまさに救世主。友達になって、自分の弱いところを見せることなどできなかった。彼らにとって、わたしが強くて、誰にも負けな
いことこそが、

いじめの恐怖に耐えうる唯一の方法だったから。恐れ多いと思って、そういう話を切り出してくることもなかったし」

「急に恐ろしくなったわ。今まで自分が享受きやうじうしていた幸せが崩れ去ってしまうことに。自分の歩いている道が、こんなにも脆く、儚いものであったことに。知恵を絞って精一杯考えた。自分がお払い箱にならない方法を、自分がいじめっ子たちのヒーローであり続ける方法を。答えは簡単だった。自分自身がいじめの火種を蒔いて、そ

れが程よく育って燃え広がってきたところを刈り取り続ければいい」
恐ろしくなった、だって？ それはぼくだって一緒だ。彼女は……、桜田さんは今、何て言っただんだ！？

「いじめの火種を学校中に撒き散らしては、広がらだした所でそれを刈り取る作業を続けたの。火種の種は、昔自分がされた仕打ちからのもあれば、『友達を作れない子たちの集まり』の中で聞いた話から作ったものもあったかな。いじめという名の火を消すのは楽だったが、その火種を撒き散らすのはもつと楽。あとはもう単純作業。自分でつけた火なのだから、その出所は自分が一番よく知っている。」

いじめられて泣いている子の前に、何食わぬ顔でやってきて、その顔でいじめという名の火を消してしまえばいい。そうすればみんな幸せだ。その幸せがいいことか悪いことかなんてことはどうでもよかった。

それが永遠に続くのだから。それが、わたし。いじめっ子たちを倒して回って、正義のヒーロー面して校内を闊歩する女の子。でも、その実態は滅ぼすべきいじめの火種を、自ら率先して蒔いて回る自作自演の、つぎはぎだらけでばろつぼろの女の子。それもわたし」

唐突に、ぼくの目の前に彼女の顔が迫る。桜田さんは、ぼくの目の前に顔を近づけて、ぼくに返答する機会を与えず、ただひたすら自分の言いたいことを並び立てたのだ。

「おかしいよね？ おかしいでしょ？ そんなやつがどんな面して『君のそばにはわたしがいる』……？ 自意識過剰も大概にしろって感じ。便利よね、『がんばれ』って言葉は。自分は何もしないのに、むやみやたらと相手を縛りつけて、自分はその責務を全く負わない。わたしの一番大好きな言葉よ。知ってた？ 何が「いじめられっこ同士仲良くする場を設けた」？ あんなもの、どこまでも他力本願で、自分のエゴ丸出しで、弱い子たちを”隔離”しただけで、

何の解決にもなりはしない。ほんと、どうしようもないやつだね。桜田瞳璃って女はさ」

わけが、わからない。

ぼくの目の前で背を向けて話すこの人は、本当にあの桜田 瞳璃さんなのか？

夏場なのに暑そうなブレザーに、スカートの下からちらちらとぞくおみ足と黒いスパッツ。さらさらとしたきれいな亜麻色の髪、女の子特有のいい匂い。

記号的には桜田さんその人だ。間違えようがない。凜とした後ろ姿が夕日に映えて、とても勇ましくて、かつこいい。

だが、ぼくはそれを桜田さんだと認識することができない。信じることができない。言っていることがめちゃくちゃだ。自作自演、自己満足、……虚勢、見栄？ わけのわからない単語がぼくの頭の中をぐるぐると回り、事態をますます意味不明なものにしてゆく。しかし、それでもなおひとつだけ彼女に聞いておきたい。どんなに頭が混乱していても聞いておきたかったことだ。

「なんで、そんな話をぼくにするんですか？ そんなことしたって、まるで意味がないじゃないですか」

当然の疑問だ。ぼくにそんなことをして何になる。告げ口を恐れているのだろうか。

ケンカになればぼくに勝ち目はない。暴力に訴えてぼくの口を封じるつもりなのだろうか。

そんなことをするような人ではないことは分かっていたが、それでも体が恐怖に耐えかね、脳がぼくに身構えるよう命令を出す。しかし、彼女のといった反応は、ぼくの予想とはまったく異なるものだった。

「決まってるじゃない。わたしのこの姿を、この事実を、学校中に広めて伝えてほしいから。それだけのこと」

桜田さんは背を向けたままぼくの問いに答えた。そこまでさつき

までと同じだ。だが、先ほどまでとは違うことがひとつある。彼女の声に生氣と、深い悲しみを宿していたことだ。

そして、予想外だった。彼女が口にした理由が弁解ではなく、事実をみんなに伝えること、だったのだから。

「君だけだったんだよ。わたしがどんなひどいことをしても、あきらめずに、わたしの手も借りようとしなくて、しかも『守る側から守られる側になりたい』なんて言う子は。最初はすぐにあきらめるだろうって思ってた。わたしに泣きついてきてくれるだろうって思ってた。けど、君はあきらめるところかわたしに泣きつくどころか、それに耐えて友達と二人でわたしを捕まえようとした。そんな君たちを、いや君を見てて気づいたんだ。自分のしていることのばかばかしさを、ね」

ふいに、彼女の声が少しくぐもる。

「いつしょ、だったんだよね。わたしが一番嫌ってたいじめっ子たちと。なんで気付かなかったんだろ。いや、気づいてたんだよね、わたし。気付かないふりをしていただけ。自分の幸せを、自分の居場所をなくしたくなかったから」

彼女は自分の肩を抱き、その場にしゃがみこむ。

「あーあ。わたしってなんで馬鹿なんだろう。みんなの笑顔が初めて始めたことが、他の子たちを苦しめてたなんてね。何が正義の味方よ、何が弱い者の救世主よ。わたしなんて、わたしなんてッ、いなくなっちゃえばいいんだ、消えちゃえばいいんだ！」

もう、見ていられなかった。ぼくは桜田さんの元に駆け寄り、彼女の体をぎゅっと抱きしめる。

肌のふんわりとした感触と、鼻孔を抜ける甘い香りが心地良かった。ぼくは叫ぶ。

「だめだ！ そんなの……だめに、決まってる！」

「なんで、なんでよ！ わたしなんて、わたしなんて……」

桜田さんがぼくの方を向くと同時に、彼女が何かを手にしているのが見えた。あれは、美術の授業で彫り物か何かのときに使う小刀

だ。

ぼくの方を向いているのは刃ではなく柄の部分だ。自分の胸を自分で刺し貫くつもりなのか。やらせるわけにはいかない。

「やめてください桜田さん！ そんなことをして何になるんです！」
「離して、離してよ！ わたしは、わたしはもう……」

小刀の刃を桜田さんに向けさせないよう掴み掛かるぼくと、それを阻止し、自分の胸に突き立てようとする桜田さん。力こそ圧倒的に桜田さんのほうが強かったが、気が動転して上手く力が入らないらしく、相手にならないということにはなかった。

しかし、その周囲はというと無事では済まされない。ぼくは小刀を納めさせようと夢中になるあまり、ブレザーを脱がし、桜田さんのYシャツの袖や肩部分をびりびりに破いた上に、彼女の胸元のボタンをもむしり、引きちぎってしまったのだ。

桜田さんだつて女の子だ。それ相応の恥じらいは持っている。胸元までびりびりにされたことで、桜田さんは手を止めて頬を赤らめ、破れた部分を両腕で必死に押さえ、後ろを向いてしゃがみこんだ。

「さ、ささ、桜田さん！ ぼ、ぼ、ぼく……」

小刀を奪つて放りつつ、必死に頭を下げて謝るぼくに、桜田さんは何も答えてはくれない。

答えてはくれないが、破れたYシャツ越しの背中に映る、『おびただしい数の傷痕』を見て、ぼくは絶句してしまった。

切り傷刺し傷、青あざにタバコの痕。美しい顔に美しい髪形からは大よそ想像できないような凄惨なものだ。嫌になつて目を背けようとしたぼくに対し、桜田さんは顔だけ少し振り向いて口を開いた。
「いいよ見ても。いつそ脱がしてくれても。正義君になら……」

「いやそんな！ できませんよぼくには！ やっ、やっ、やめてください」

「冗談。どう？ これが、わたしなんだよ。わたしの家っていうか、お父さんが証券会社のエリートで、すごく外面のいい人だったんだ。

だからそれに対する風当たりがゼーんぶわたしに来てたの。同じクラスの子たちにやられた痕がほとんどだけどさ、そういう家の子は家の中でも結構辛いんだ。お父さんやお母さんが世間体つてのを気にするからさ、そうそう言いだせるものでもないし、言い出しても聞いてくれないもん。それどころか、”私の娘なのに何をしてるんだ”って、お父さんにまでそういうことを”された”こともあつてさ。不思議に思ってたでしょ？ 夏になってもひとりだけ冬服のまのわたしを。脱げないのよ、これ。脱いだら、何もかもばれちゃうから”

かわいそう。

いや、桜田さんの気持ちはそんな月並みな言葉では言い表せそうにない、波乱と苦悩に満ちていたものだったと思う。

それでもなお、よく弱い子たちのために戦えていたと思う。ぼくは心底、この人のことを誇りに思えた。

だからこそ、ぼくが彼女を救ってあげなきゃいけない。この学校で悩み苦しんでいるいじめられっ子たちのためにも。そして、彼女自身のためにも。

「だめ、というのは間違いかもしれません。じゃあ、そう……間違ってる、間違ってるんです！」

「間違ってる……？ 何がよ！ わたしのしてきたことが？ わたしの存在そのものが！？ ああ、もう！ 死んでやる！ この階段の手すりから身を乗り出して」

「ち、ちが…違いますよ！ そういう意味ではなくて！ えっと、その……、ええと、ああの」

この人を下手に刺激してはまずい。次に何かあったらばくの力じやどうにもならない。

考えろ、考えろ。どうすれば彼女を立ち直らせることができるのかを、どうすれば彼女の目からこぼれ落ちる涙を止めることができるのかを。

しかし、焦れば焦るほど、思案を巡らせれば巡らせるほど、その答えは頭の中で複雑に絡み合い、どうすればいいのか、どうしていいのか、わからなくなっていた。

桜田さんを思いとどまらせるための言葉を頭の中で必死になって探していると、急に、抱きつくばかりを振りほどき、桜田さんが立ち上がった。何があつたかと思い、ぼくも立ち上がって彼女の見ている方向を向く。

「やめてっ！やめてよお……っ！」

「てめえ、ふざけやがって！ 何のつもりだ、ああ！？」

下の階で何やら話し声が聞こえる。一方は儚げで、か弱い声。もう一方は激しい口調でまくし立てる荒荒しい声。

階段の手すりから下の様子を見る。小さな女の子が、体の大きい男の子に壁まで追い詰められて罵声を浴び、今にも泣き出しそうな表情でがたがたと震えている場面がそこにあつた。

「てめえ……よくも俺が、ネット上で”自演”していたことを、先生やクラスのやつらにチクリやがったな！ ざけんじゃねえよ、あの後俺がどうなったと思っただ！ 親父やお袋にしこたま殴られて、『お前には金輪際小遣いはやらん』なんてのたまわりやがったんだぞ！ ざけんじゃねーッ」

「でも、でもでも……、自分の言ったことを他人のフリして言うのってすごく悪いことだし、それにそれに、告げ口したのわたしじゃ」

「今更シラ切ってどうなるってんだよ？ 俺の”ＩＰアドレス”をやつらに晒したメールの送信者の名前、

お前のだったじゃねえか！ お前以外の、誰が、それをあいつらにチクれるってんだよ！ 言えよ、言ってみろよ！ 言えるもんならな」

「知らない、知らない……よお！」

なんだかよく分からないが、インターネット上で何か、やってはいけないことをしていたことがバレて、その腹いせに女の子を襲っているようだ。

明らかな逆恨みだ。彼女には何の落ち度もない。ぼくは階段を駆け下り、彼らのもとに向かう。相手はかなり大柄で目つきが悪く、強そうだ。でも問題ない。すぐそこにはあの桜田さんがいる。やられるわけがない。

しかし、ぼくが階段を降り、最後の一段に足をかけても、桜田さんは肩を抱えて震え、そこから一步も動かなかった。

「何やってるんです桜田さん！ 早くしないとあの子が」

下の彼女は男に服の襟首を掴まれて、いっぱい涙を眼にため、そこには弁明の余地もない。絶体絶命だ。今行つてやらないでいつ行くんだ。ぼくは桜田さんを急かすが、彼女はそこからぴくりとも動かない。

ぼくの言葉に耳を貸さない桜田さんに辟易していると、彼女は弱弱しく、とぎれとぎれな声で何かをぼそりと口にした。

「あの……こ、ミナ、ちゃん。ミナ、ちゃん……なのよ」

「ミナちゃん？」

名前を言われて思い出した。彼女が集めた手芸部で、小さなぬいぐるみを作つて桜田さんに渡していたつけ。そんな名前が今さら出てきて何だというんだ。

ぼくがそう思っていると、桜田さんは苦しそくに、言葉を絞り出すようにして紡ぐ。

「あいつの話、先生やみんなにメールでバラしたの……わたしの。あいつを陥れて、もう一度ミナちゃんをいじめさせようと考えたの。わたしは、わたしはなんてことを！」

そうか。そういうことだったのか。

間が悪すぎた。いつもの桜田さんなら、何の疑問も罪悪感も持たず、颯爽と駆けつけて、あの見苦しい自演男に重い一撃をくれてやつてたところだろう。

しかし、今は違う。今の桜田さんは自分のやっていたことが間違
いだと気づき、心の底から絶望しているのだ。動けないのも当然だ。
ぼくの責任だ。こんなことになったのは、ぼくが彼女を精神的に
追い詰めてしまったから。

ならばどうする。考える必要はない。やることはひとつだ。

ぼくは声がかれるほど叫んで階段を駆け下り、ミナちゃんの襟首
を掴む男に向かい体当たりをかました。

倒せないだろうけど、ひるんで隙を作り、彼女の手を引いて逃げ
出すことぐらいはできるはず。そう思った。

しかし、理想と現実とは全く違った。彼はミナちゃんから視線を逸
らさず、体当たりをしようとするぼくの左肩を右手で掴んで受け止
め、勢いをつけて地面に叩きつけたのだ。インターネットで自作自
演なんてせこい真似するような奴のくせして、こんなに強いのは卑
怯じゃないか？

ぼくはうつ伏せになり、顎を軽く打って床に倒れこむ。痛みはか
なり強いが、今はそんなことなど問題ではない。彼はぼくの背中を
左足で体重をかけてぐりぐりと押し込みながら踏みつけ、嫌みった
らしい口調で言う。

「ばあーか。上であんな声だしてて気づかねーやつがいるかっての。
ヒーロー気取りの桜田のマネごとかア？ 相手見てからやれよな。
てめえみたいなチビ、俺に敵うと思ってるのか。ああ？ ほら、ほ
ら、言ってみろよ！ 何とか言えよ、コラ」

みみっちい自演男はさらに左足に掛ける体重を強め、ぐりぐりと
押しつける。

背中だけではない、体中が痛みで悲鳴を上げる。涙よりも先に血
が出そうな気がした。

抵抗しようともがいてみるも、背中を踏みつけられてしまってい
て、いくらもがいても彼に触ることすらできない。頼みの綱の桜田

さんは自責の念で動くことすらできない。万事休すだ。

”中途半端に力をふるっても、やられてもっとひどい仕打ちを受ける”、か。

別にミナちゃんも桜田さんも悪くない。考えなしにたちの悪いやつに向かつていったばくが悪いんだ。何も気負うこともない、何も考えることもない。どうせ飽きたらやめてくれるんだから。あと少しの辛抱だ。あと少しの、あと少しの――

ふと、背中にかかっていたやつの力が緩んだ。何が起きたかと思いい、ぼくは必死に首を動かして見上げる。

そこにあつたのは、桜田さん……ではなく、先ほどまで恐怖に打ち震え、涙をいっばいためたミナちゃんの姿だった。彼女は涙をこらえ、鼻水をすすする音混じりな声でやつに言う。

「そ、そそ……ずずつ。そんなこと……っ、ずびつ。わ、わたしが……ずず、ずつ。ゆるひやない！　ずず……っ」

よく見ると、やつの頬がうつすら赤く染まっている。なるほど、今の音はミナちゃんのビンタの音だったのか。

――ぷちん。

そんな音が実際にしたかどうかは分からないが、おそらく今のひとことで彼の中の何かが切れた。それと同時に自演男はミナちゃんを押し倒し、両腿で彼女の体を固定して、右こぶしを振りかぶった。逃げられないようにして彼女を何度も何度も殴りつけるつもりか。そんなこと、させるわけにはいかない。させられない。

しかし、そんな思いとは裏腹に、起き上がるうとしても体に力が入らない。今まで踏みつけられていた痛みのせいだ。

気合いを入れ、自身の情けない腹筋や背筋に力を込める。しかし、

ぼくのこのどうしようもない体はびくともしない。どうすればいい、どうすればいいんだ。

突然、ぼくの周りがさつと暗くなった。今の今まで夕日が屋上を照らしていたはずだ。日の入りにはまだ早い。月食か？ いや、そんな話は聞いていない。突然の通り雨か？ だつたら雨音がぼくの耳に届くはずだ。そんなものは全く聞こえない。じゃあ、これは一体何事だ？ なんだというんだ？

異変に気づいたのは自演男も一緒だった。この怪異を疑問に思い、彼もまた視線を上に向ける。

——うお、りゃああああああああああつ！

彼が意識を失う前に見た最後の光景は、スカートの中に広がる黒いスパッツの股先と、白い上履きの靴底だった。

ぼくたちを覆う黒い影の正体は、誰でもない桜田瞳璃さんその人だ。

にわかには信じられない話ではあるが、彼女は十二段ある階段のその一番上からジャンプし、彼の顔目掛けて飛び蹴りを見舞ったらしい。

そんなものを直に喰らった彼の顔がどうなったのか。興味はあるが、それを見る勇氣はぼくにはなかった。

ぼくは目を白黒させ、仰向けに寝そべっているミナちゃんに駆け寄って無事を確認すると、うまく着地できなくてうずくまる桜田さんの元に駆け寄った。

「桜田さん！ 桜田さん！ 大丈夫ですか！？ なんていう無茶を」「あ、ああ、うう……。正義くん、か。わたしは大丈夫。ミナちゃんは？」

「無事ですよ。でも、なんで桜田さんが」
ミナちゃんに応急の要を保健室の先生に伝えるよう促し、ぼくは

桜田さんに肩を貸し、保健室まで連れて行くことにした。

その最中ゆつくりと廊下を渡りつつ、ぼくの問いに桜田さんは戸惑いつつ答えてくれた。

「そう、だね。なんて言うのかな。ミナちゃんがあの男にビンタして、それで馬乗りにされたとき、

わたしの中で何かがぷちん、って切れたのかな。だからだと思う。詳しくはわたしにも分かんないや」

「そう、だったんですか。さすがですね。桜田さんは」

「それよりも。教えて、くれないかな。わたしのどこが、どう間違っているのかをさ」

「えっ！？ ああ、それは……」

唐突に、先ほどこしていた”間違い”の話に話題が戻る。

さつきまではどう答えていいのか分からなかった。でも、今はその答えを説明できるような気がする。

そう思ったとき、すでにぼくの口は言葉を紡いでいた。

「やっぱり、桜田さんはどこまで行ってもいじめっ子たちの”救世主”なんです。強きをくじき、弱きを助ける。テレビのヒーローそのまま。だから、だからこそ間違っていると思うんです」

「なんで？」

「ミナちゃんがなんであんなことをしたか、分かりませんか？ 強くてやさしい、救世主でヒーローな桜田さんが大好きで、尊敬していて、自分もそうありたいと思ったから、なんですよ」

正直なところ、ミナちゃんがそこまで考えていたかどうかは分からない。

けど、こうなったらもう、最後まで言っただけしかない。

「でなきゃ自分を泣かそうとしていたような、怖い奴相手にビンタなんて、するはずないじゃないですか。桜田さんの言うことが、やっていることが伝わったんですよ。ミナちゃんやぼくだけじゃない。森元くんや手芸部の子たちだって、そう思っているはずですよ。桜田

さんみたいになりたいって、何かしたいって。確かに、桜田さんのやっていたことは許されることじゃない。けど、そこから逃げちゃいけないんです。許されないことなら、償いきれないことなら、背負って生きるしかない。ぼくが見てきたテレビのヒーローは少なくとも、たとえ倒した相手が本当はいい人だったとしても、悩みこそすれ、それだけでヒーローであることを捨てたやつはいない。どんな悩みや苦悩があっても、それを乗り越えて、やせ我慢でも空元気でも強くあろうとする。だって、ヒーローである自分が折れてしまったら、自分を慕ってくれる人たちも、みんな折れてしまうから。桜田さんは……どう、なんですか？」

桜田さんは、ゆっくりと体を起こすと、ぼくの顔をじっと見詰めた。

その瞳には先ほどまでの憔悴した弱弱しさは残っておらず、初めて会ったときの、あの澄んだ瑠璃色の輝きが戻っていた。

「わたしをテレビのヒーローと同じに語らないでよ。わたしはそんなに強くない、強くなかないよ。でも、やらなきゃいけないのよね？ 望んでなかったわけじゃないけど、自分から名乗った覚えもないけどさ」

「そうです。でも、ぼくは『がんばって』とは言いませんよ。いや、きつとぼくだけじゃなく、みんなだって。言うときはきつと、こう。『失敗はやり直せる。それを正そうとする心と、仲間さえいれば。ぼくたち、わたしたちがその仲間になる』って」

ぼくの言葉に、桜田さんはおかしくてたまらないとも言いたげに笑いだす。言いまわしが回りくどかったのかなあ、やつぱり。

「ふふつ、結局は一緒じゃない。ヒーローってのも楽じゃ、ないよね。わたしのやってること、決して簡単なことじゃないよ。わかっているの？」

「分かってますよ。でも、ぼくたちはひとりじゃない。みんなが、桜田さんのことを慕うみんなが一緒ですから。同じことはできなくっても、その手伝いや心の支えにはなれると思います」

「そつ、か」

桜田さんが笑ってくれた。今までと同じ、いや、それ以上に眩しい笑顔だ。

きつと、ぼくが指摘する前から彼女は気づいていたのだろう。自分のしていたことへの罪悪感に。矛盾に。

彼女はそれを押し殺し目を背けて、今ある幸せを守ろうとしていたんだ。だからこそ、それが重荷となって、足かせとなって、自分の心に傷を残していたんだ。

でも、今の桜田さんにそんな重荷や足枷^{かせ}はない。全て捨て去ることができたのだから。

「あ、あのう……」

「なあに……って！ さ、桜田さん！？ わ、わわわ……私たちに、な、な、な。何か、ごようですかっ」

「ねえ、正義君。やっぱりダメなんじゃないかなあ。桜田さんに普通の友達、って」

「ダメなわけない！ 桜田さんだよ！？ 他の誰でもない、あの桜田さんだよ！ できないはず、ないよ」

「いや、”あの”桜田さんだからこそ、不安だけどなあ。友達っていうか、あのままじゃあ主従関係になりそうだよ」

桜田さんは今、友達を作ろうと頑張っている。元が相当ないじめられっ子で、今はいじめっ子たちを震え上がらせる暴力っ子だ。その道はとても長く、そして険しい。

最初はぼくが友達になると言った。しかし彼女は、『気持ちとはともうれしいけど、それじゃあ意味がないの。友達は自分の力で作らなくっちゃね』と言って、ぼくの申し出を突っぱねた。

自分で言っておいて何だが、確かにそうだなと納得した。仲間内で友達を作っても、彼女のイメージは何も変わらない。それに、桜田さんからしても、その関係が果たして友達と言えるのか、分からなくなってしまうからだろう。

ぼくたちはただ、そんな桜田さんを見守ることしかできない。

言えども言えども断られるその姿を見て、何度も手を差し伸べてあげたいとは思っけれど、ぼくも森元くんも固唾を呑んでそれを見守る。

——大丈夫、桜田さんならきつとできる。

——みんなの笑顔の、幸せのために戦って、守れたあなたなら。そう心の中で何度も何度も呟きながら。

「あつ、あつ、あつ……あああああののののっ！ おっ、おっ……おともだちにつ！ なって、くださいっ！！」

思いつきり顔を紅潮じしつさせた桜田さんの顔は、今までのどんな表情よりも、きらきらと輝いて見えた。

後編（後書き）

かつて自分のサイトで別種の作品の二次創作として掲載していたものを、

主人公の名前と学年を書き換えてこちらで掲載したものです。

たしか08年の暮れあたりに掲載したものだと思います。

直接制作期間三ヶ月。

同年、『ダークナイト』という映画を観賞し、

「正義と悪は表裏一体」、「底なしの悪でさえも正義を求める」

などと言ったテーマに感銘を受けて、それっぽいを書こうとしていたのですが、

舞台を学園に据えてしまったせいで、ダークナイトのイメージが掻き消え、

結局いつもの自分みたいな文章になってしまいました。

自分語りの小説と言うことで、とかく主人公のしゃべりがうざいのですが、

それ以上にヒロイン・瞳璃のモノローグらしきものが長い長い。

校正にあたり合間合間に主人公の合の手を加え、

少しでも薄めようとしたのですが、それでも一文一文のこの長さ。

読者様がどうこの前に、自分が泣きたくなります。

作者自身、こういった”いじめ”を受けた経験がないので、

瞳璃のいじめその他は推測でしかないのですが、

いじめって、直接あーだこーだされるのも怖いのですが、

それよりなにより、『沈黙』や「無視」が一番怖いと思うのですよ。

誰も彼もが無視をするせいで、人が何を考えているか分からない。

だから、無理矢理に人と接するときには、自分で勝手に人のことを推測して、

その憶測だけで人を推し量って付き合おうとするから、結局嫌われて、結局独りぼっちになっちゃうっていう、あれが。

その辺の気味の悪さみたいなものが、

この長ったらしい文章を読んだ方に伝わってくればいいなと思いました。

ちなみに「桜田瞳璃」と言う名前は、

作品を作るにあたって、文章を中盤まで書いても名前が全く決まらず、

”正義を連想させる単語”縛りで、女の子の名前にそぐうものをと、何個か数を打って構想しているうちに、

半ばヤケクソ気味に”道理”という言葉と”瑠璃色の瞳”という言葉葉の掛けを思いつき、

そのまま採用したものです。正義と関係があるのかどうかよく分かりませんが。

最初はこれはどうなんだと疑問符が付いていたのですが、読んでもらった友達からおおむね好評をいただいたので、とりあえずそのままにしておきました。

主人公の方は、自分の部屋に転がっていたお菓子の箱からの思いつきです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6991m/>

セイギノミカタ

2011年3月29日00時11分発行